

## 巻頭言

### 精神神経学雑誌の発展を願う

中村 純 日本精神神経学会理事  
Jun Nakamura

私は、2006年より副編集委員長となり、武田雅俊先生が本学会理事長に就任されたのを受けて2012年8月から精神神経学雑誌（精神誌）の編集委員長を引き継いだ。この間、「精神医学の潮流」「精神医学のフロンティア」「書評」などを企画してきた。また、依頼総説、学会シンポジウムを基にした特集記事、論文化した教育講演、座談会などを掲載し、読み物としては面白くなったと思う。

一方で、学会英文誌 *Psychiatry & Clinical Neurosciences* が発刊され、Impact Factor も2点近いレベルにまで発展したため、118巻という日本で最も歴史ある精神科関連の和文誌である本誌の役割を問い直す必要を感じている。雑誌がもつ課題について会員の皆さんと共有したい。

第一の課題は、学会誌にもかかわらず原著論文の投稿が少なく、受理できる論文も極めて少ないことである。実際に2015年に受理した原著論文はわずか3編であった。生物学的な研究の多くは英文誌に発表される傾向にあるが、精神医学の場合、症例の詳細や精神病理学的な解釈をする論文は和文でしか伝えられないのではないかと考える。専門医や指定医取得のために若い精神科医のエネルギーが注がれて、丹念に臨床経験をまとめる作業をする時間や研修、討論の場が大学病院などでも少なくなっているのではないかと危惧している。

第二は、精神誌は、少数例を集めた臨床研究、あるいは生物学的な研究は受理されないという誤解があるのではないかと危惧する。これらは全くの誤解であって、薬物療法による効果や副作用を示した貴重な症例も掲載したいと考えている。

論文の投稿者からみると、査読が厳しいものと受け止められているのではないかと危惧している。本編集委員会

は原則として毎月学会事務局で開催され、2名の査読者が指名されて、翌月に査読論文に対する意見を20名の編集委員の前で述べる形式をとっている。論文に対する教育的な内容の議論が多く、なんとか掲載したいとの意図で投稿者に査読結果を返している。全国各地には貴重な症例があると思われる。新たな専門医制度では、リサーチマインドの涵養も大きな柱になっている。指導医の方々には、若い精神科医を育てるためにも、本誌への症例報告の投稿をお願いしたい。

学術総会は専門医制度の導入以来ますます充実してきており、それに対応するように精神誌の内容も学会員16,000人のニーズに応えなければならないと思っている。学術総会に参加することができない会員とも、充実したシンポジウムや教育講演はぜひとも本誌で情報を共有したい。さらに、精神医学の臨床に直接役立つ研究や臨床経験などの情報を早急に伝え、精神医学、精神科医療のレベルを向上させることも本誌の役割の1つと考えている。現在学会として取り組んでいるICD-11分類や治療ガイドラインなども学会員の共通言語として早急にまとめていただいて、載せなければと考えている。

一昨年の第116巻からオンライン版を会員に配信できるようになった。実は送料だけでも年間1千万円以上の経費が必要だったという現実的課題があったこともオンライン版にした理由でもあるが、紙媒体も希望者には送付しており、利便性は相当改善したと考えている。学術雑誌として、利益相反の開示や個人情報の問題など細かな点で改善の余地があるが、会員に役立つ学会誌にしたいと思っているので、投稿および学会誌改革に対する建設的なご意見を、ぜひお願いしたい。